

受験番号
算用数字 ()

二〇一六年度ソワニエ看護専門学校一般入試（一次）試験問題

（解答は、全て解答用紙へ記入しなさい。特に指示のない限り、答えの末尾に「。」を付け足す必要はない。また特に断りの無い限り、同じ選択肢を二度使うことはない。）

I 次の語の対義語を漢字で書きなさい。

- ① 鋭角 ② 悪意 ③ 異色 ④ 左遷 ⑤ 赤字

II 次の空欄のカタカナを漢字に直して、四字熟語を完成させなさい。

イ 悪戦（ク）闘 ロ 一念（ホツ）起 ハ 花鳥（フウ）月 ニ 徹（トウ）徹尾 ホ（ハ）顔一笑

III 次の文を読んで、後の設問に答えなさい。

音楽が存在するためには、まずある程度の静かな環境を必要とする。（①）、鐘もしくはそれに類似する音が鳴り響いているなかで、鐘の音を素材とした音楽を演奏しても、その音は環境に同化してしまうので、音楽としては聞こえない。（②）、赤い紙に赤色のクレヨンで絵を画こうとするのと同じである。

（③）、程度を越えた静けさ——真の静寂は、連続性の蟲音を聞くのに似て、人間にとつては異常な精神的苦痛をとまなうものである。日常生活のなかでは、このような体験をすることはないが、音響器材の実験用などに使われる無響室に閉じ込められると、音を発してもほとんど百パーセント壁や床や天井に吸収されてしまい、自分の声さえ充分に聞くことができなくなるので、恐怖に近い非常に強い孤独感に襲われ、それに耐えるのは苦痛であり、限度をこすと精神の異常をさえたすという。

また大砂漠のなかで夜を迎えると、ときには完全な静寂に支配されるために、じぶんがその静寂のなかに吸い込まれていくような、ちょうど、無響室に閉じ込められたときの恐怖に近い感覚に襲われるという。

このような真の静寂は、日常生活のなかには存在しないまったく特殊な環境ではあるが、この事実は音楽における無音の意味、あるいは、しだいに弱まりつつ休止へと向う音の、積極的な意味を暗示している。休止はある場合、最強音にもまさる強烈な効果をハッキリする。

われわれがふつう静寂と呼んでいるのは、したがってかすかな音響が存在する音空間を指すわけだが、このような静寂は人の心に安らぎをあたえ、美しさを感じさせる。音楽はまず、このような静寂を美しいと認めるところから出発するといえよう。

作曲家は自分の書いたある旋律が気に入らないとき、ただちにそれを消し去ってしまうだろう。書いた音を消し去るということは、とりも直さずふたたび静寂に戻ることであり、その行為は、もとの静寂のほうがより美しいことを、みずから認めた結果にほかならない。

音楽は静寂の美に対立し、それへの対決から生まれるのであって、音楽の創造とは、静寂の美に対して、音を素材とする新たな美を目指すことなかにある。

すべての音は、発せられた瞬間から、音の種類によってさまざまな経過をたどりはしても、静寂へと向う性質をもっている。川のせせらぎや、潮騒のような連続性の音であっても、その響きはただちに減衰する音の集団である。音は、終局的に静寂には克つことができない。

また一つの交響曲を聞くと、その演奏が完結したときに、はじめて聞き手はこの交響曲の全体像を画くことができる。音楽の鑑賞にとって決定的に重要な時間は、演奏が終った瞬間、(4) 最初の静寂が訪れたときである。(5) 音楽作品の価値もまた、静寂の手のなかに委ねられることになる。現代の演奏会が多分にショー化されたからとはいえず、鑑賞者にとって決定的に重要な瞬間が、演奏の終了をまたない拍手やカンセイなどでさえぎられることが多いのは、まことに不幸な習慣といわざるをえない。

静寂は、これらの意味において音楽の基礎である。(芥川也寸志 「音楽の基礎」より)

問1 傍線部「イゝホ」のカタカナは漢字、漢字は平仮名にそれぞれ改めなさい。

問2 () 「①②③④⑤」に入れるにふさわしい語を次から選び、符号で答えなさい。

- a したがって b しかし c ちょうど d つまり e たとえば

問3 二重傍線部「A」の「環境」は『どんな』環境』のことを言っているのか。「どんな」の説明としてふさわしい表現を文中により二十字前後で抜き出し、その頭の五字で示しなさい。

問4 二重傍線部「B」の「この瞬間」が意味するところについて、「瞬間」という語を使わないで表現されている部分がある。本文より十字前後で抜き出しなさい。

IV 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

(この話の舞台は孤児院である。上級生の船橋は高二で、「ぼく」は中三。)

入学試験の前々日、寒さがぶり返し、大雪が降った。ベッドに単語帳を持ち込み、布団をかぶって、暗記に精を出していると、だれかがやってきてベッドの前に立ちどまった。こっそり布団を持ち上げてみると、立ちどまったやつは膝から下の部分が、目の前にあつた。ズック靴に「船橋」と名前が書いてある。焦臭いものがつうんと鼻を衝いた。殴られ蹴られる前に、ぼくには必ずこの予徴があるのだった。殴られる瞬間のあの時間の長さ。どんなに素早く殴られても、あの一瞬、時の流れはずいぶんゆっくりとたゆたい、拳はのろのろと迫ってくるのだった。むろん、逃れられはしない。どのくらい痛いだろう？ このあいだくらいか？ いやもつとずつと耐えられないくらい痛いだろう……そんなことを凄く早さで自問自答しながら、ただ待っていなければならないのだ。胃の底のあたりにしゅうつと寒けがし、ついで吐き気がし、世の中がでんでんばらばらに思え出し、深い没落感に襲われる。あのいやな一秒。それがどうやらまたやってきそうだった。ぼくは素知らぬふりして、単語の暗記を続けていた。しかし、頭の中には、いつ来るか、どう来るか、このふたつの考えしかなかった。船橋はまだ疑つと立っていた。とうとう、耐え切れず、ぼくは布団から顔を出した。

「よう……」

問5 「二重傍線部」Cには「一米九十糶の高さから、ぼくの襟首を掴みあげてベッドから引摺りおろし、講堂へ引っぱっていった」とある。この表
現から舟橋の残忍さが伝わってくるが、この前の部分で発せられた、およそ舟橋には似つかわしくないある言葉が、その残忍さをより強く印象
づける働きをしている。その言葉とは何か、五字で抜き出しなさい。

V 次の文を読み、後の間に答えなさい。

蕨虫（みのむし）、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似て、これも恐ろしき心あらむとて、親の、あやしき衣ひき着せて、「今、秋
風吹かむをりぞ来むとする。待てよ」と言ひ置きて逃げて去にけるも知らず、風の音を聞き知りて、八月ばかりになれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに
鳴く、いみじうあはれなり。（枕草子 第四十一段より）

問1 傍線部「①」「②」の読みを書きなさい。ただし、「八月」は「はちがつ」ではなく、旧暦の異名で答えなさい。

問2 二重傍線部「イハ」を現代語訳しなさい。ただし「あわれだ」「あやしい」は使ってはならない。

VI 次の文を読み、後の間に答えなさい。

張僧繇、呉中人也。武帝崇飾二仏寺、多命二僧繇二画之。金陵安樂寺四白龍、不点眼睛。每云点晴即
飛去。人以爲二妄誕、固請点之。須臾雷電破壁、兩龍乘雲、騰去上天。二龍未点眼者見
在。

注1 張僧繇（南北朝時代の梁の画家） 注2 点ず（書き入れる） 注3 眼睛（ひとみ） 注4 妄誕（でたらめ）

問1 二重傍線部の「①」「③」の「読み」を現代仮名遣いで書きなさい。

問2 波線部「見」は「ゲン（に）」と読む。この「見」は、「ゲン」と読む他の漢字に置き換えると意味がよく分かる。その漢字に改めなさい。

問3 部を全文平仮名で書き下し文にしなさい。

問4 本文中から漢字を四つ拾って、この文を出典とする四字熟語を書きなさい。